

白樺派を訪ねて

今回は、我孫子市を訪れ、大正時代の一時期に手賀沼のほとりで創作活動を進めていった白樺派の文人たちの業績について学びました。また、多分野にわたる文化人たちの愛した手賀沼の景観を見学し、文化の薫りと自然の美しさにふれました。

日 時 平成22年10月16日(土)

場 所 我孫子市手賀沼周辺、我孫子市白樺文学館

日 程 9:00 JR千葉駅東口NTT東日本前 集合・出発
バス移動
10:25 13:35 手賀沼周辺散策
講師、学芸員による解説、見学
昼食
13:50 15:10 手賀沼船上視察、手賀沼周辺散策
バス移動
17:00 JR千葉駅東口到着、解散

【おもな見学内容】

- 1 散策では
白樺派の文人やゆかりの文化人たちの業績や人物像について学びました。
- 2 我孫子市白樺文学館では
常設展示の見学や解説員の説明を通じ、白樺派の創作活動の様子について学びました。
- 3 手賀沼船上視察では
遊覧船上から、白樺派の愛した手賀沼の景観を見学し、文化人ゆかりの場所にも着目した地域環境の保全について理解を深めました。

9時にバスは出発。車中では、白樺派文人と芸術家との関わりや手賀沼の自然についてのVTRを視聴、今日これからの見学のための予習をして過ごしました。



白樺派とは

明治・大正期の日本の近代文学のひとつのグループのことです。明治時代の終わりごろ、フランスを中心に起こった自然科学的な文学手法に影響された自然主義（リアリズム）運動が力を得てきますが、それに批判的な立場をとるグループがいくつかありました。「高踏派・余裕派」（夏目漱石、森鷗外ら）、「耽美派」（永井荷風、谷崎潤一郎ら）とともに「反自然主義」と称されるのが「白樺派」です。

彼らは、雑誌「白樺」の同人として、個性を尊重し、自我を主張し、生命力の創造をうたい上げようとする、新しい理想主義を追求したのでした。その代表として、志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎らが知られています。

手賀沼のほとりで活躍した白樺派

志賀直哉（しがなおや1883 1971）

武者小路実篤と並んで白樺派の代表的な作家として知られています。簡潔な文体と描写による短編小説から、「小説の神様」とも呼ばれます。手賀沼のほとりに来たのは1915（大正4）年で、京都に移るまでの7年半、精力的な創作活動を行いました。「和解」、「城の崎にて」、「小僧の神様」、「暗夜行路」などがこの時期に執筆されています。この地を題材にした作品も多く、当時の生活の様子がしのべられます。



武者小路実篤（むしゃのこうじさねあつ1885 1976）

白樺派の指導者として、自己肯定の考え方を主張しました。1916（大正5）年から1918（大正7）年にかけて手賀沼のほとりに居住しました。「或る男」には、この地での生活の様子が描かれています。のち「新しき村」運動を唱え、宮崎県日向に移りました。



柳宗悦（やなぎむねよし1889 1961）

宗教哲学者で、民芸運動を始めました。民芸運動とは、日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に「用の美」を見出し、活用する日本独自の運動のことです。東京帝大在学中に「白樺」の同人となった柳は、1914（大正3）年にこの地に別荘を構え、この建物が「三樹荘」と名づけられました。



手賀沼畔に到着、我孫子市教育委員会の2講師に迎えられ、アビスタ（我孫子市生涯学習センター）の屋上で、ガイダンスが行われました。まずは市の概要についての説明です。

我孫子市は、県北西部に位置し、北は利根川、南は手賀沼を望む東西に細長い形状をしているため、「馬の背」と形容されるそうです。昭和45年7月に「我孫子町」から「我孫子市」となり、

今年市制施行40周年を迎えました。人口は約136,000人（平成22年11月）、東京のベッドタウンとして発展しており、豊かな自然が広がっています。



バーナード・リーチ（1887-1979）

の碑の前に来ました。リーチはイギリス人の陶芸家であり、画家、デザイナーとしても知られてい



ます。日本をたびたび訪問し、白樺派や民芸運動にも深く関わりました。柳宗悦とは特に親しく、日本民藝館設立にあたっては大きな力を尽くしました。後に柳宗悦の別荘三樹荘に移り住み、斜面に窯を築いて創作活動を行いました。



碑には「私は東洋と西洋の結婚を夢見続けてきた」という、リーチの理想像（東洋と西洋の融合）が示されています。



文化人も歩いた天神坂。

かつての岸辺にほど近い小道から崖を上る「天神坂」です。途中に碑があり、「かつて我孫子が北の鎌倉と言われた大正時代、文人達の集った三樹荘と椎の実の降る天神坂は彼らがこよなく愛したと言う。耳をすますと往時の人々の声が、足音がろくろの軋みが聞こえてきそうである」と刻まれています。

坂を上りつめたところに三樹荘が建ち、小道をはさんで見晴らしのいいところが、嘉納治五郎（1860 1938）の別荘であったところです。

1921（大正10）年までこの三樹荘に移り住んだ柳宗悦と正面の別荘のあるじ、嘉納治

五郎とは、甥・叔父の関係です。柳宅には、「智・財・寿」を表わすとして地元の人に信奉されていた3本の椎の木があったことから、「三樹荘」と命名されたということです。

宗悦は、ここで、手賀沼とその周辺に息づく自然と文物を観察し、のちの文芸運動につながる思索を深めたのです。

多くの文化人の交流の場、三樹荘。現在は個人宅のため邸内見学不可です。



楚人冠公園は、小高い丘の上にあります。杉村楚人冠（すぎむらそじんかん、本名 杉村 廣太郎1872 1945）は随筆家で俳人です。元新聞記者で、国際的なジャーナリストとして活躍しました。アサヒグラフ創刊に尽力、コラム「天声人語」の命名者としても知られ、わが国の新聞事業において多方面で力を発揮しました。



随筆「湖畔吟」には、手賀沼の美しさが描かれています。嘉納治五郎や村川堅固などと「手賀沼保勝会」を結成するほど、手賀沼の景観を守るために心を砕きました。楚人冠が愛した手賀沼をよく望めるところに句碑が建てられています。



我孫子市白樺文学館は、2001（平成13）年に開館した、白樺派の文人と彼らの作品を中心に据えた文学館です。館内には手書きの原稿、書斎に飾られた文物、夏目漱石や小林多喜二から志賀直哉に宛てられた手紙など、活発で多彩な活動を示す品々が展示されています。

中に、ロダンの彫刻がありますが、白樺派の面々はロダンの芸術的姿勢に大変ひかれており、その展覧会を開こうとまでしたそうです。文化・芸術のジャンルを超えた活動をしていたのです。



柳兼子（宗悦の妻・ソプラノ歌手）の歌声を聴きながら、説明を受けました。



雑誌「白樺」全160号の表紙です。

この後、すぐ前の志賀直哉邸跡を見学しました。



旧村川別荘は、西洋史学者で東京帝国大学教授であった村川堅固が1917（大正6）年に購入した別荘です。1921（大正10）年に我孫子宿本陣にあった離れを移築・改装しており、江戸時代後期の我孫子宿の建築物をしのぶ資料としても貴重です。新館は手賀沼を見下ろせるよう窓ガラスが大きくとってあり、寄木造りのモダンなつくりとなっています。

息子の堅太郎も西洋史学者で、高校の歴史教科書の著作でも有名です。

室内には、地域の昔の写真資料もあります。



昼食後は、2隻の船に分乗して、手賀沼から文人たちの活躍の場を視察しました。手賀沼は面積6.5km²、平均水深0.86m、最深部は3.8m。常磐線・成田線沿線の宅地開発に伴って、平成12年度まで水質は全国ワースト1でしたが、ビオトープや排水機場の設置等により徐々に改善、生物の数も回復傾向にあります。平成20年度の調査では、10年前と比較したCOD値（水の汚れを表す単位の一つ）の増減率がマイナス62.7%と、全国の湖沼で他を大きく離してトップということです。

船から見ると水しぶきが美しく輝き、水質の改善が確実に進んでいることを実感します。



水上から沼の岸辺を眺めると、豊かな自然が広がっていることに改めて気づかされます。この落ち着いた雰囲気が、文人たちの創作意欲をますます沸き立たせたのかも知れません。



下船後は、マコモやヨシを眺めながら情緒豊かな沼のほとりを歩きました。一日ご案内いただいた我孫子市教育委員会のお二人に見送られ、千葉に戻ってきました。

船長の分かりやすく楽しい説明に、笑いが絶えませんでした。

今日はとてもよい天気の中、我孫子市の魅力に触れられたことと思います。
円滑な運営・進行にご協力ありがとうございました。お疲れさまでした。

似顔絵イラストは、森元夏木氏による。

参加者の声

内容が充実していて一日楽しく学べました。

変化に富んだコースで面白かったです。楽しい1日でした。我孫子は1度訪れたい
と思っていました。ありがとうございます。

とても興味深く見学できました。説明の方も大変素晴らしかった。

案内人が親切で丁寧にきめ細かく説明されたところが大変よかったです。ありがとうご
ざいます。感謝申し上げます。

専門家の詳しい説明がよくわかり勉強になりました。

生涯学習センターの学芸員の方、ボランティアの方の説明が詳しくてよかった。我
孫子の人々が郷土を大切にしておられる気持ちが伝わってきました。

船で手賀沼を見学できたところがよかった。

天気もよくて、船上めぐりも大変気持ちよかったです。ハスの咲いている時期のも
見たかった。

千葉県と文学との深いつながりがわかった。

参加して本当によかった。自分も文化人に近づけた感じがしました。